

# 希望 この手に

沖縄の貧困・子どものいま

第3部⑬

「おんぶして」「立つて」  
「右!」「左!」「まっすぐ」  
滋賀県大津市の幸重社会福祉士事務所が入る民家での夕食後。エネルギーあふれる小學生の兄弟がスタッフの背中におひさり、騎馬戦が始まった。手足を弾ませて激しく指示を飛ばす。骨格もたくましくなりつある少年たちを背

トワイライトステイで、スタッフの背中に騎馬戦に興じる兄弟。子どもが子どもらしくいられる貴重な場だ=滋賀県大津市の幸重社会福祉士事務所



て身を任せ、たまつたものを

発散させているようだ。同市では子どもたちが放課後から夜を家庭のように過ごす「トワイライトステイ」が市内の3事業所によってそれ

ぞで開かれている。夜の子どもたちの居場所は沖縄県内に、スタッフはひとり親世帯。病気や障がいなどから子育てがうまく機能していない家庭が多い。 「家ではテレビを見大半はひとり親世帯。病気や障がいなどから子育てがうまく機能していない家庭が多い」という。「家ではテレビを見ない」。激しく遊び回る子たちを柔軟な笑顔で見守

に、スタッフは額に汗を浮かべながら笑顔で「馬」に徹す

で守られた夜を過ごすのが特徴だ。利用者の負担はなく、

料金は子どものひろば。幸重

い子」に対象を絞り、家庭的

モデルとなつたのは10年から

京都市でトワイライトステイ

を実施していたNPO法人山

科醸造子どものひろば。幸重

事務所の代表で、児童養護施設職員や大学教員を経て現在

はスクールソーシャルワーカー

の幸重恵恵さんはその理事長を務めていた。

事業は3年目となり利用を待つ子どもたちもいるが、予

を広げる動き掛けまではなが

りできない。だからこそ分

析ができる、法知識もある専門

職が必要だ」と幸重さんは語

る。社会変革を視野に活動で

きるワーキャルワーカーの育成が求められている。

琵琶湖も黒く沈んで見える

午後8時すぎ、兄弟を送り

に、広々と整備された国道に

車を走らせた。弟は遊び尽く

し、スタッフに小さな体を預

けて寝息を立てている。幸重

さんは言う。

滋賀・  
幸重社会福祉士事務所

## 家庭的な夜「トワイライトステイ」

# 「少數のしんどい子」支援

にはまだない。週に1日、基本的に1世帯のきょうだいが2~3人程度の大人と遊び、夕飯の食卓を囲んで入浴も共にする。目的は子どもが子どもらしく、安心して過ごせる場を提供すること。その体験が学習や学校生活などすべての基本となるからだ。

多くの子どもが集まる子ども食堂と違い、「少數のしんどい

り、幸重事務所のスタッフで社会福祉士の木村友香理さん(24)は言う。

同市では市社協と地域の民間団体が協働し、学習支援と居場所づくりを合わせた取り組みとして2014年にトワイライトステイを始めた。15

年度からは生活困窮者自立支援法に基づく助成金は年間

支給法に基づく助成金は年間20万円。送迎のガソリン代や食費程度にしかならず、家賃も人件費には到底届かない。

後は「事業者の持ち出し」という。

予算化が不可欠だが「日常的な活動ができる民間団体は

いじ、何かが劇的に変わるわけじゃない。この子たちもその後学校に行かなくなるかもしれないし、就労にも困るかもしれない。それでも、い

つか行き詰まつたときに「あ

のうち学校に行かなくなるかも知れないし、就労にも困るかもしれない。それでも、い

つか行き詰まつたときに「あ

んな場所もあつたな」と思い出します。訪ねてきたり、周囲にSOSを出したりしてくれ

れば

静かに温かく、子どもたちの10年、20年後を見据えた。

(黒田重)